



# 全国私立大学 FD連携フォーラム

News Letter No.6

## CONTENTS

---

### P.2 2013年度取組概要

---

#### P.3-4 2013年度後半期活動報告【懇談会企画】

立命館大学 教育開発推進機構 土岐 智賀子

---

#### P.5 2013年度後半期活動報告【地域別企画（西日本地域）】

関西大学 教育開発支援センター副センター長・教育推進部 三浦 真琴

---

#### P.6 新規加盟校のご紹介

関東学院大学／東洋大学

---

#### P.7 FD徒然草 Part5『失われつつあるFDの「純真」?』

法政大学 教育開発支援機構FD推進センター長 児美川 孝一郎

---

#### P.8 入会のご案内／実践的FDプログラムのご案内

---

## 2013年度取組概要

### 2013年度 幹事会

日時：2013年6月15日(土)12:00～13:00

会場：立命館大学 衣笠キャンパス

### 2013年度 総会・パネルディスカッション

日時：2013年6月15日(土)13:00～17:00

会場：立命館大学 衣笠キャンパス



2013年度から代表幹事に着任した法政大学・児美川FD推進センター長(2013年6月総会)

#### パネルディスカッションテーマ：

授業アンケートの明るく、楽しい活用事例

**パネリスト：** 安岡 高志氏 (立命館大学 教育開発推進機構)  
山田 竜作氏 (創価大学 学士課程教育機構)  
小濱 歩氏 (國學院大学 教育開発推進機構)  
杉井 俊夫氏 (中部大学 大学教育研究センター)  
川那部 隆司氏 (立命館大学 教育開発推進機構)



「授業アンケートの明るく、楽しい活用事例」をテーマに討論が行われた(2013年6月パネルディスカッション)

### 2013年度 第1回幹事校ミーティング

日時：2013年12月23日(月)13:00～14:00

会場：立命館大学 東京キャンパス・衣笠キャンパス

### 2013年度 第1回会員校ミーティング

日時：2013年12月23日(月)14:00～15:00

会場：立命館大学 東京キャンパス・衣笠キャンパス



TV会議で関東・関西会場を結び、ミーティングを実施した(2013年12月会員校ミーティング)

### 2013年度 懇談会企画

日時：2013年12月23日(月)15:05～17:15

会場：立命館大学 東京キャンパス・衣笠キャンパス

- テーマ：** A 授業改善アンケートは本当に必要か  
～有効な調査・実施方法、分析及びフィードバックについて～  
B アクティブ・ラーニングを用いた正課および  
正課外授業支援の在り方  
～アクティブ・ラーニングの実効性について～  
C 学生発案型授業の必要性を問う  
～学生FDと教員FDの融合の可能性について～

### 2013年度 地域別企画(西日本地域)

関西大学FDフォーラム「アクティブラーニングとははじめat&from Kansai University」共催

日時：2014年1月25日(土)13:00～17:30

会場：関西大学 千里山キャンパス



### 2013年度 第2回幹事校ミーティング

日時：2014年3月18日(火)13:00～15:00

会場：甲南大学 ネットワークキャンパス東京・岡本キャンパス

## 2013年度後半期活動報告【懇談会企画】

## 2013年度懇談会企画を開催しました

立命館大学 教育開発推進機構

土岐 智賀子

2013年12月23日(月)、幹事校・会員校ミーティング終了後、加盟校による懇談会企画を実施しました。課題やグッド・プラクティスなどを共有することにより、各大学における取り組みの検討や改善の一助とすることを目的として始められたこの企画は、2011年12月の第1回懇談会から数えて今回で3回目になります。

関東、関西の会場でそれぞれ3グループに分かれて懇談が行われ、各グループでは活発な議論が交わされました。各グループでの懇談の後には、テレビ会議システムを利用して、グループで話し合われた内容を報告し合い、情報共有を図りました。今回も各自が自大学への取り組みへの具体的なアイデアやヒントを得た場となりました。

## 実施概要

日時：2013年12月23日(月)15:05～17:15

場所：関東会場 立命館大学 東京キャンパス

関西会場 立命館大学 衣笠キャンパス

(※テレビ接続)

## テーマ

## テーマA

授業改善アンケートは本当に必要か

～有効な調査・実施方法、分析及びフィードバックについて～

## テーマB

アクティブ・ラーニングを用いた正課及び正課外授業支援の在り方

～アクティブ・ラーニングの実効性について～

## テーマC

学生発案型授業の必要性を問う

～学生FDと教員FDとの融合の可能性について～

## 各グループ懇談概要

## ▶ テーマA「授業改善アンケート」

## 関 東

神奈川大学、関東学院大学、国士舘大学、創価大学、中央大学、中部大学、  
日本大学、法政大学、立教大学(50音順、以下同様)

- 現状では学部ごとに独立して実施しているところが多い。特に大規模校、伝統校、学部の独立性が強いところなどでは全学的な取組みに展開するのが難しい。
- 自由記述の取り扱いについては、ほとんどの大学で公開はしていなかったが、教員が各自で自由に編集をした後で公開している例とNGワードを削除して公開している例が紹介された。後者については、NGワードの選定が難しいという課題が残っている。
- アンケートの実施方法や回数は、毎年全科目で実施しているところや、一部の科目のみで実施し、全科目を隔年ないし数年おきに実施するなど各大学でばらつきがあった。

- WEBを利用したアンケートの実施は多くの大学で検討されていた。すでに実施している大学から、メリットとしてフィードバックが早く行えること、デメリットとして回収率が下がることが報告された。
- 授業アンケート結果のフィードバックについて課題が残っている。個々の教員には結果が知らされているものの学生への情報の提供の仕方(特に履修登録前の学生にどのような形で情報を伝えるか)が確立されていない。また、改善が必要とされる教員に対する学部の措置等、結果を組織として利用していく方法を検討する必要がある。

## 関 西

愛知大学、関西大学、関西学院大学、立命館大学、龍谷大学

- スマートフォンの利用について多くの大学で検討が始められていた。
- 教員個人の授業改善に役立っているが、学部としてのFD改善に活用できないのが次の課題である。個別の評価を学部に伝え、それをもとに総評を学部に用意してもらい報告書にまとめている事例があった。
- フィードバックの仕方について、報告書としてまとめている、

学内に限定して個人評価を閲覧できるようにしている、全体の集計のみ閲覧できるようにしている等の例があった。

- 現段階では、IRや卒業生アンケート等の他の調査と授業評価との連携はできていない。
- 結果をふまえた個々の授業診断や、改善のための相談についてのニーズは高いのではないと思われる。ただし、実施にむけては様々な困難が予想される。

## ▶ テーマB「アクティブ・ラーニング(以下AL)」

### 関 東

青山学院大学、國學院大学、芝浦工業大学、中部大学、帝京大学、東京農業大学、日本大学、法政大学、立教大学、早稲田大学

- 初年次教育の枠組みの中で実施されている例が複数あった。授業の中で対話・コミュニケーションをとるためにはグループワークは適している。全学的な取組みとするには、大きなエネルギーを必要とする。
- ALを実施するにあたり、必ずしも可動式の机が必要とは限らない。またコミュニケーション・ペーパーやクリッカーの利用など、ALの展開にあたり方法はいろいろある。
- グループワークにはピア・プレッシャーという機能があり、集団への帰属、さらには大学への帰属意識を高め、退学率が減少したという事例報告があった。
- ALやPBLには手間がかかるので、いかにTAを活用していくか、教員のための研修を実施するなどの支援を考えていく必要がある。
- ALを活性化させる議論の一方で、ALが万能ではないことも認識しておかなければならない。

### 関 西

関西大学、関西学院大学、帝京大学、立命館大学、龍谷大学

- 正課内でのALを展開する工夫として、ゲストスピーカー招聘の際の授業運営手法(事前準備による活発な質疑応答で対話型学習のモデルを示し他の学生を巻き込む)、授業支援学生や既習生・卒業生の活用、教育支援ツール(ICT)の活用、コメントをつけて課題を返却している事例とその際の文書入力ソフトの活用などの紹介があった。
- 昼休み時間にラーニングコモンズでAL活用のための教員向けのセミナーを開催している例が紹介された。
- 先進的な取組みの情報の共有や課題の共有と克服が全学的には展開しづらいことが報告された。

## ▶ テーマC「学生発案型授業」

### 関 東

創価大学、東洋大学、日本大学、法政大学、明星大学、立教大学、立命館大学

- 学生発案型の授業が開講されている事例があるものの、大学としての教育の質の保証の担保が困難であることから、導入・活用には慎重であるべきである。学生の自主講義としてサポートしていくのが妥当であるという声が多かった。
- 学生FDと教員FDの融合の可能性については、現段階では、まず学生FDの役割について、大学の規模・文化・背景をふまえて整理しなければならないという点で意見が一致した。

### 関 西

関西大学、立命館大学、龍谷大学

- 関西大学での事例(募集によって選定された科目提案学生委員による学生調査を経た企画立案、授業の実施)報告が行われた。プロセスの中でディスカッションや地域との関わりを通して、学生の主体的な学びが展開されているという事例報告を受けて、取組みが参考になったことに加えて、目標とする人材育成のためにチャレンジする姿勢が刺激になったとの報告があった。



## 2013年度後半期活動報告【地域別企画(西日本地域)】

## JPFF地域別企画(西日本地域) 関西大学FDフォーラムを開催しました

関西大学  
教育開発支援センター副センター長  
教育推進部

三浦 真琴

2014年1月25日、全国私立大学FD連携フォーラムとの共催・関西地区FD連絡協議会の協賛の下に第10回関西大学FDフォーラムが開催されました。今回のテーマ『アクティブラーニングとははじめ at & from Kansai University』は可能性と課題が明らかになってきたアクティブラーニングについて原点から考え直し、関西大学で展開されている授業実践について報告し、これを機にアクティブラーニングの輪を学内外に広げていくことを「ねらい」と「ねがい」としたものです。当日は、全国の大学等から64名の参加をいただきました。第一部の基調講演、能動的な学生の取り組みを伝える第二部のポスターセッションを経たのち、参加者からの質問や意見、感想などをフィードバックする時間を第三部に持ちました。

語義にしたがえばアクティブラーニングは行為・動作、あるいは状態・態度を示すものであり、その動作や態度への到達が目標として設定され、その目標を実現するために手法が編まれ、方略が組まれますが、2012年の中教審答申がこれを手法の総称として定義したため、ノウハウやチップス、マニュアルの作成や入手に汲々とする傾向が生まれています。基調

講演で演者はこのことへの警鐘を鳴らし、“teaching(teacher-centered)からlearning(student-centered)へ”というパラダイムシフトに与するならばアクティブラーニングを実現するためには先ず学生をどのような学習者に育てたいのかという哲学的思惟が必要であると訴え、特に初年次における「問い」の構造や広がり・奥行きを学ぶ体験がその後の「学び」をより充実したものにする可能性があるとして、「問い」を学生自らが発見・発掘する「学問モデル」が有用であると報告しました。

第二部ではこの学問モデルを支援するLA(Learning Assistant)、コラボレーション・commonsでラーニングカフェを開催するLA、ライティングラボで学生の支援をするTA、シラバスや担当教員など包括的に科目をデザインして開設を提案する科目提案学生委員等の取り組みが紹介され、参加者からの質疑やコメントで会場は熱気に包まれました。また学生を主体的・能動的にするための情報や知見を交換し、創出し、共有するネットワーク(ALN)の開設も呼び掛けられました。

✉ 問い合わせはaln@ml.kandai.jpまで。

### 当日のプログラム

日時：2014年1月25日(土) 13:00～17:30

場所：関西大学千里山キャンパス

第2学舎2号館C304/C301教室

|       |                                                  |
|-------|--------------------------------------------------|
| 13:00 | <b>開会挨拶</b><br>教育推進部長・副学長・経済学部教授<br>林 宏昭         |
| 13:10 | <b>基調講演</b><br>教育開発支援センター副センター長・教育推進部教授<br>三浦 真琴 |
| 14:30 | <b>ポスターセッション</b>                                 |
| 16:30 | <b>フィードバック</b>                                   |



関  
東  
学  
院  
大  
学

◆全国私立大学FD連携フォーラムへの期待

本学は、3キャンパス7学部で12000人の学生が学ぶ総合大学として、充実した教育カリキュラムを提供しています。一方で、全学一体となって本学の教育理念及び教育目標を実現するための取り組みが、これまで必ずしも十分ではなかったという現実もありました。この課題を解決するためにも、全学的FD活動の推進が不可欠と考え、次項で述べる取り組みを行っているところです。

しかしながら、まだまだFDに関する知見や経験が不足しており、FD体制の強化が喫緊の課題となっていることから、このたび本フォーラムに加盟させていただきました。本フォーラムでは、先進大学の事例に学び、加盟校の教職員の皆様と交流、情報交換することで、本学のFD活動の推進、ひいては教育改善、教育の質の向上・転換を図ってまいりたいと考えております。

◆学内のFD 実践紹介

本学では、組織的FD活動として、以下のような実践を行っています。

1. 高等教育研究・開発センターの設置・運営

全学組織として『KGU高等教育研究・開発センター』を2013年4月に設置しました。学生の学力低下への対応やキャリアアップ、選ばれる大学としての教育の魅力アップ、教員の教育力の向上など、同センターの抱える課題は少なくありませんが、同センターを中心に、大学をあげてこれらの課題にチャレンジします。その一環としてセンターにFD推進部会を設け、FDの拡充も図っています。

2. 学生による「授業改善アンケート」の実施

春学期(前期)および秋学期(後期)にそれぞれ実施し、アンケート結果および各科目の結果に対する教員のコメントを公開しています。

3. 授業公開の実施

6月(春学期)と11月(秋学期)を「公開授業月間」として位置付け、専任教員が各期1科目の授業の公開を実施し、結果を取りまとめて公開しています。

4. 全学FD・SDフォーラムの開催

毎年夏期に行われる全学教員研修会の一環として、実施しています。(2013年度:2013年9月4日に「主体的な学び」をテーマに実施)

5. 全学FD・SD講習会の開催

新任教員および希望する教職員を対象として、年度当初に実施しています。

6. 各学部・研究科のFD活動

全学部・大学院研究科(法科大学院を含む)にFD委員会を設置し、学部等の特性に応じたFD研修等を実施しています。



2013年度全学FD・SDフォーラムの様子

東  
洋  
大  
学

◆全国私立大学FD連携フォーラムへの期待

これまで、本学においてもFD推進センターおよび各学部・研究科を中心に、さまざまなFD活動を行ってまいりましたが、本学の教育の質保証に十分に活かされていないのが現状です。FD活動のさらなる実質化のためには、他大学の事例やノウハウなどの情報収集や今以上の知識の蓄積と共有が必要であり、そのような意味で本フォーラムに参加することは大きな意義があると考えています。

また、本フォーラムの実践的FDプログラムは、個々人が好きな時間に取り組むことができる点において、従来の研修会によるFD活動以上の効果が見込まれるため、積極的に活用させて頂きたいと考えております。



◆学内のFD実践紹介

東洋大学では、教育活動の継続的な改善の推進と支援を目的として、各学部・研究科からの委員により構成されるFD推進支援センターを2008年12月に設置しました。これまでの本学のFDに関する取組は、以下のようなものです。

- ・全学FD活動報告会
- ・全学的なGPA導入
- ・全学共通フォーマットによる授業評価アンケートの実施と教員へのフィードバック
- ・各種FD研修会  
(TA、新任教員、一般教員、語学担当教員)
- ・授業改善事例シンポジウム
- ・学生FDチームとの連携

「新任教員FD研修会」グループディスカッションの様子

## FD徒然草 Part 5

## 失われつつあるFDの「純真」?

法政大学 教育開発支援機構FD推進センター長  
児美川 孝一郎



気のせいかもしれないが、この国の高等教育政策において、大学教育の「質保証」が声高に叫ばれるようになった頃から、各大学が取り組んでいるFD活動は、その性格を失いに「純真でないもの」に変容させてきたように感じる。

郷愁の念を込めて、あえて漫画チックに書けば、「まあ、これまでの大学教育は、学生の優秀さの上にあぐらをかいてきたわけよ。これからは、大学も大衆化の時代だ。授業だって学生指導だって、少しは創意工夫しないといかんのだ。それは、学生のためだし、実は教員だって、そのほうが楽になるってもんだぜ。お互い、いろいろチャレンジしてみて、その結果を交流しようや」といった(居酒屋談義のような)牧歌的なFDには、もはや存在の余地が与えられていない。今やFDとは、大学の「認証評価」やそのための「内部質保証」の活動とも深く結びついた組織的な取り組みだからである。

かの中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」(2008年)は、各大学・学部等でのディプロマ、カリキュラム、アドミッションに関するポリシーの明確化と、その実現に向けた努力を求め、その後の大学教育改革に大きな影響を与えた。その答申には、まさにその「学士課程教育における三つの方針」に関する「共通理解を確立し、教員各自の教育実践の在り方を主体的に見直す場としてFDを機能させ、活性化を図る」必要性が宣言されていたのである。大学設置基準においても、この年から、各大学がFDに取り組むことが「義務化」された。

つまり、論理としては、入れ子構造になる。FDは、各教員が「主体的に」取り組むべき活動であるし、そうでないと意味をなさない。しかし、各教員が「主体的に」FDに取り組むように促し、組織化・制度化し、点検・評価していくことを、各大学は国から「義務」づけられている。誤解を恐れずに言ってしまうと、「主体性の発動を強制する」という矛盾

を孕む「舞台」の上で、各大学のFDは踊らされているのではないのか。

冒頭にFDの「純真」が失われつつあるのではないかと書いたのは、まさにこの「舞台」への、その「演出装置」への、筆者の違和感に由来している。そもそもFDには、二つのベクトルがある。教員同士の同僚性や学部等の教育文化を基盤とし、相互の交流や研鑽を通じて、それを全体に広げていこうとする、いわば「ボトムアップ」の活動のベクトル。もうひとつは、上から組織化・制度化され、全体に浸透させていくという「トップダウン」の活動のベクトルである。大学教育の「質保証」以降のFDでは、どうしても後者が優勢となるだろう。

そうすると、授業や教育改善に向けた共通の「基準」や「指標」等が持ち込まれ、PDCAサイクルを回すがために、それらが数値化される。組織的な点検・評価もはじまる。講義型の研修がダメだとなると、ワークショップ型がやたらと流行ることにもなる。一般の教員を「支援」するためのFDの専門家も導入される。一事が万事であって、その結果として、フツウの教員が教育者としての「主体性」(というか、意欲)を奪われ、「やらされ感」ばかりを募らせるのだとすると、FDとは、いったい何のためにあるのか?

筆者はもちろん、「トップダウン」型のFDの推進やそのための環境整備が不必要であるとか、意味がないなどと言いたいわけではない。全体の底上げとレベルアップのためには、それも求められよう。だが、そのことが「角を矯めて牛を殺す」事態にならないためにも、たとえ牧歌的と言われようが、理想主義に過ぎると揶揄されようが、今こそ奮勇を振るった大学教員たちによって、「ボトムアップ」タイプのFD活動が多種多様に生成し、FDの「純真」が輝いていくことへの期待を、心の底から叫びたいと思っている。



## 入会のご案内



全国私立大学FD連携フォーラムは、全国の中規模以上(学生数8,000名以上)の私立大学が連携し、全国の高等教育の質の向上を目指し、活動しています。本フォーラムでは、高等教育の質の向上に資するため、加盟校間での情報共有や意見交換を促進しています。

ウェブサイトでは取り組みの概要や、加盟校のFD活動についてご紹介しております。詳しくは下記ページをご覧ください。

URL: <http://www.fd-forum.org/fd-forum/>

入会を希望される場合には、ウェブサイト「入会のご案内」から「入会届」をダウンロードの上、事務局まで郵送でお送り下さい。

※フォーラム運営に係る費用は、会員校の年会費で賄っております。

(年会費:5万円(2014年3月現在))

※入会に関するご質問がございましたら、事務局までお問い合わせください。

## 実践的FDプログラムのご案内

実践的FDプログラムとは、教員が自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察することができる知識、技能、態度、特にアクティブ・ラーニングを実践する能力を修得する研修プログラムです。

本プログラムは、教員の4つのアカデミック・プラクティス(教育、研究、社会貢献、管理運営)に対して、

- ① 教育学をはじめとした系統的な理論のオンデマンド講義
- ② 授業技術やコミュニケーションスキルを育成するワークショップ
- ③ 個々の教員ニーズに応える日常的な教育コンサルテーション

から構成されています。

私立大学には、クラス規模の大きさ、教員の持ちコマ数の多さ、学生の学力と学習意欲の多様性など、多くの困難な教育条件が存在します。たとえば、各大学では、新任教員研修において本プログラムを利用することを通して、大学教員に求められる教育力量と職能を育成し、大学教育の質を保証することが可能となります。

各大学の対象者や実施目的の違いによって、講義(オンデマンド)や講座(ワークショップ)等を選択し、様々なプログラムを作ることが出来ます。詳しくは、ウェブサイトをご覧ください。

JPFF会員校

[http://www.fd-forum.org/fd-forum/html/fd\\_application.html](http://www.fd-forum.org/fd-forum/html/fd_application.html)

JPFF非会員校

[http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/itl/fd\\_p/fd\\_program.html](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/itl/fd_p/fd_program.html)



### 利用申込について

利用期間は1年間となります。(5月利用開始、翌年3月末終了)

上記のウェブサイトより「利用申込書」をダウンロードし、事務局へお送り下さい。

利用申込は随時受け付けておりますが、手続きのため、利用いただけるまでに約2週間かかります。

事務局校

立命館大学 教育開発推進機構 (事務局:教育開発支援課)

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 TEL:075-465-8304 FAX:075-465-8318 e-mail:fd71cer@st.ritsumei.ac.jp